

J.S.バッハ Johann Sebastian Bach

ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 BWV1041 (約14分)

Violin Concerto in A minor, BWV1041

- 第1楽章 —
- 第2楽章 アンダンテ Andante
- 第3楽章 アレグロ・アッサイ Allegro assai

ヴァイオリン協奏曲 第2番 ホ長調 BWV1042 (約17分)

Violin Concerto in E major, BWV1042

- 第1楽章 アレグロ Allegro
- 第2楽章 アダージョ Adagio
- 第3楽章 アレグロ・アッサイ Allegro assai

2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調 BWV1043 (約15分)

Concerto for 2 Violins in D minor, BWV1043

- 第1楽章 ヴィヴァーチェ Vivace
- 第2楽章 ラルゴ・マ・ノン・タント Largo ma non tanto
- 第3楽章 アレグロ Allegro
- ※第1ヴァイオリン:オリヴィエ・シャルリエ 第2ヴァイオリン:モニック・ラピンス

— 休憩 (20分) — Intermission

ヴィヴァルディ:ヴァイオリン協奏曲集 op.8「四季」 (約40分)

Antonio Vivaldi : Violin Concertos, op.8, "The Four Seasons"

- 「春」** 第1楽章 アレグロ 第2楽章 ラルゴ 第3楽章 アレグロ
"La primavera" in E major, op.8-1, RV269 (Allegro / Largo / Allegro)
- 「夏」** 第1楽章 アレグロ・ノン・モルトーアレグロ 第2楽章 アダージョ 第3楽章 プレスト
"L'estate" in G minor, op.8-2, RV315 (Allegro non molto - Allegro / Adagio / Presto)
- 「秋」** 第1楽章 アレグロ 第2楽章 アダージョ・モルト 第3楽章 アレグロ
"L'autunno" in F major, op.8-3, RV293 (Allegro / Adagio molto / Allegro)
- 「冬」** 第1楽章 アレグロ・ノン・モルト 第2楽章 ラルゴ 第3楽章 アレグロ
"L'inverno" in F minor, op.8-4, RV297 (Allegro non molto / Largo / Allegro)

ヴァイオリン:オリヴィエ・シャルリエ Olivier Charlier, Violin
演奏:兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2015 **5/1**(金) 2:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター **KOBELCO** 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター
※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

飯尾 洋一(音楽ライター)

バロック期の二大作曲家によるヴァイオリン協奏曲

ドイツで活躍したバッハと、イタリアで名声を高めたヴィヴァルディ。ほぼ同時代を生きたバロック音楽の二大作曲家のヴァイオリン協奏曲が並べられた。

同じヴァイオリン協奏曲といっても、その作風は対照的だ。バッハが書いたのは「絶対音楽」、つまり文学や絵画などの音楽以外の題材を必要としない純粋な音楽。音楽は音の動きや構成など、楽想そのもので表現される美である、という考え方だ。

一方ヴィヴァルディが「四季」で目指したのは描写音楽としてのヴァイオリン協奏曲。ソネット(14行詩)に綴られた四季折々の光景を音楽で描いた。たとえば第1曲「春」では、有名な冒頭の主題に続いて、独奏ヴァイオリンが小鳥のさえずりを表現する。

作曲の方法はまったく違うが、生み出された音楽はどちらもまぎれもなく時代を代表する傑作だ。

ライター「**必聴ポイント**」



J.S.バッハ:ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 BWV1041

独奏ヴァイオリンが奏でる第2楽章のメロディ

第2楽章冒頭のゆったりとした前奏に続いて登場する独奏ヴァイオリンののびやかなメロディは絶美。静かに物思いに耽るような表情から、繊細なニュアンスが生み出される。

J.S.バッハ:2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調 BWV1043

第3楽章のスリリングな対話

この協奏曲の独奏者は二人。二人のヴァイオリニストがお互いを模倣するかのような対話をくりひろげる。第3楽章では対話が白熱し、緊迫感あふれるスリリングな展開に。

ヴィヴァルディ:ヴァイオリン協奏曲集 op.8「四季」

まどろむ羊飼いと、犬の鳴き声

「春」の第2曲で描かれるのは、花が咲き誇る牧場の心地よい風景。木の葉のざわめき、まどろむ羊飼いの(ヴァイオリン)、犬の鳴き声(ヴィオラ)がそれぞれ見事に音で表現される。

PROGRAM NOTE

曲目解説 — 演奏をより深く楽しむために 飯尾 洋一(音楽ライター)

J.S.バッハ: ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 BWV1041

初演: 不明

背筋が伸びる峻厳なバッハ

古典派以降のヴァイオリン協奏曲では、独奏ヴァイオリニスト一人に対して、オーケストラが後ろにずらりと陣取るといったイメージだが、バッハの時代の協奏曲はぐっと簡潔な編成になっている。独奏者と弦楽器と通奏低音で編成されるのが基本形。18世紀初めに確立されてまだ間もないヴァイオリン協奏曲のスタイルを、バッハは他人の作品を書き写したり編曲したりしながら身につけた。

バッハのヴァイオリン協奏曲はいずれも1720年頃のケーテン時代、あるいは1730年頃のライプツィヒ時代に書かれたものと推測されている。

第1楽章の冒頭の鋭くくさびを打ち込むような動機は印象的。背筋がびんと伸びるような峻厳な雰囲気は全曲を貫く。

第2楽章では独奏ヴァイオリンがゆったりとした歌うようなメロディを奏でる。孤独なモノローグ風。

第3楽章は一転して、活発な舞曲に。8分の9拍子の弾むようなジークのリズムに乗って、独奏ヴァイオリンの技巧的なパッセージをはさみながら力強く高揚する。

楽器編成

ソロ・ヴァイオリン、弦楽5部、チェンバロ

J.S.バッハ: ヴァイオリン協奏曲 第2番 ホ長調 BWV1042

初演: 不明

晴れやかで、ユーモアも漂わせる人気曲

バッハが残したヴァイオリン協奏曲は、本日演奏される3曲のみ。実際にはもっとたくさんの曲を書いていたのではないかと推測されているが、惜しいことにこれだけしか残されていない。

3曲のなかで唯一、明るく晴れやかな楽想を持っているのがヴァイオリン協奏曲第2番ホ長調。平明さゆえか、バッハの存命中からたびたび演奏され、死後バッハの音楽が顧みられなかった時代にも例外的に演奏されてきた人気曲である。バッハ本人によりチェンバロ協奏曲第3番二長調として

編曲されているので、同じ曲をチェンバロ版で聴いたことのある方もいるだろう。

第1楽章は跳躍するような明快な主題で開始され、朗らかさとともに、人懐こいユーモアも漂わせる。

第2楽章では独奏ヴァイオリンが愁いを帯びたメロディを綿々と紡ぎ出す。内省的な悲嘆の音楽。

第3楽章は典雅な舞曲風。活気にあふれ、独奏ヴァイオリンの技巧性を際立たせながら、上機嫌のうちに曲を閉じる。

楽器編成

ソロ・ヴァイオリン、弦楽5部、チェンバロ

J.S.バッハ: 2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調 BWV1043

初演: 不明

模倣による2台のヴァイオリンの対話

バロック時代の協奏曲では、複数の独奏楽器が置かれることも珍しくなかった。この曲では2台の独奏ヴァイオリンが用いられる。2台のヴァイオリンは対等な関係にあり、お互いに相手を常に模倣しながら、演奏をくりひろげる。一人の問いかけに対して、もう一人が応答し、それにまた相手が答え……といった音楽による対話が、端正で格調高い協奏曲を作り出している。精緻なポリフォニー(複数の声部の絡みあい)も聴きどころのひとつだろう。

他の2曲の協奏曲と同様に、急—緩—急の3楽章から構成されている。

第1楽章は第2ヴァイオリンの峻厳な主題で開始され、これを第1ヴァイオリンが模倣する。合奏部分と2台のソロを中心とする部分を交替させながら曲が進む。

第2楽章はゆったりとした安らぎの音楽。抒情的なメロディがよどみなく流れる。ここでも独奏ヴァイオリンは互いを模倣して、細密な綾を織りなす。

第3楽章では緊迫感を高め、スリリングな音楽が展開される。

楽器編成

ソロ・ヴァイオリン2、弦楽5部、チェンバロ

Profile

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750)

ドイツの作曲家。数多くの音楽家を輩出したバッハ一族のなかでもっとも重要な作曲家であることから、「大バッハ」とも呼ばれる。ワイマールで宮廷音楽家としてヴァイオリン演奏の職務についた後、アルンシュタット、ミュールハウゼンの教会オルガニストとして活躍。さらにケーテン宮廷の宮廷楽長、ライプツィヒのトーマス教会学校カントルを務め、宗教音楽や器楽曲の分野に多数の傑作を残した。バロック期の最後を飾る作曲家。



ヴィヴァルディ:ヴァイオリン協奏曲集 op.8「四季」

初演:不明

季節の風物詩を音楽で鮮やかに活写する

ヴェネツィアの四季の風物詩を、春夏秋冬それぞれ3楽章ずつの協奏曲集として描いたのが、ヴィヴァルディの「四季」である。ヴィヴァルディの代表作という以上に、わたしたちにとって最もなじみ深いバロック音楽の名曲といえるだろう。

ヴィヴァルディはこの作品にソネット(14行詩)を添えた。それぞれの曲で、詩と音楽は密接に対応している。たとえば有名な「春」第1曲の詩は「春が来る、楽しげに。小鳥たちは陽気な歌で春を迎える。泉が湧き出る。空が黒く覆われ、雷鳴が轟く。嵐が去ってふたたび小鳥が歌う」。冒頭の快活なメロディは春の到来の喜びであり、続く独奏ヴァイオリンは小鳥のさえずりを描写する、といったように、ヴィヴァルディの音楽は雄弁に四季の情景を描写する。

「夏」では照りつける太陽、カッコウや山鳩の歌、雷鳴と稲妻、「秋」には豊作を祝う村人たちの宴、心地よい大気、角笛と鉄砲を携えた狩、「冬」には冷たい雪、氷、大雨、北風などが表現される。

心地よい春と秋の情景に比べて、夏の嵐は激しく、冬の寒さは厳しい。時代も国も超えて、生々しい季節感が伝わってくる。

楽器編成

ソロ・ヴァイオリン、弦楽5部、チェンバロ

Profile

アントニオ・ヴィヴァルディ (1678~1741)

イタリアの作曲家。ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂のヴァイオリニストをつとめる父親から音楽を学ぶ一方で、聖職者になるための教育も受けて、司祭に叙任した。ピエタ養育院のヴァイオリン教師に任ぜられ、養育院の少女たちの音楽教育のために演奏会用の器楽曲を多数作曲。40年にわたり養育院で音楽活動に携わり、作品の出版を通じて国際的な名声を獲得した。晩年はウィーンでオペラ上演を企てたが、成功は果たせず、貧困のうちに没した。

